美し国へ（うまくに）

「美し国づくり」対談・鼎談シリーズ 〈1〉

満ち足りた心の豊かさを

「美し国」へ――。わが国の経済は成長期から成熟期に入ったといわれて久しいが、多くの国民がいまだ真の豊かさを実感できておらず、世界に誇ってきた安全性も近年危うさを増している。従来の効率・経済性一辺倒の都市、地域づくりを見直し、表面的な美しさを超えた「満ち足りた良い国」をつくるにはどうしたら良いのだろうか。こうした課題の解決に向けてＮＰＯ法人「美し国づくり協会」（進士五十八理事長）は会員による対談・鼎談（ていだん）をシリーズで展開する。１回目は元日本建築家協会会長の小倉善明氏と東京都市大学特別教授の涌井史郎氏に語り合ってもらった。

涌井　史郎氏

（わくい・しろう）東京農業大学農学部造園学科卒業後、石勝エクステリアを設立。愛・地球博会場演出総合プロデューサー、ハウステンボスなど多くのランドスケープ計画に携わった。東京都市大学特別教授、岐阜県立森林文化アカデミー学長、なごや環境大学学長。ＮＰＯ法人「美し国づくり協会」理事。

小倉　善明氏

（おぐら・よしあき）東京大学工学部建築学科卒業後、日建設計工務（現日建設計）に入社。ハーバード大学大学院留学後、日建設計に復職。取締役、常務取締役を経て2012年退社。現在はＳｔｕｄｉｏ―Ｏ主宰。日本建築学会副会長、日本建築家協会会長などを務めた。ＮＰＯ法人「美し国づくり協会」理事。

司会　２人の出会いをお聞かせ下さい。

小倉　はっきりは覚えていませんが、初めてお会いしたのは僕がハーバード大学の留学から帰ってきて最初に携わった三井物産本社ビルの現場ではないかと思います。その後、美し国づくり協会のイベントで再会した際に「ランドスケープをやっている涌井さんだ」と思った記憶があります。ハーバードの大学院にランドスケープ・アーキテクチャーのコースがあって、ランドスケープアーキテクトがアーバンデザインに携わる時のアプローチが違うという話を聞きました。

涌井　私も記憶が定かではありませんが、石勝エクステリアの社長を務めていた頃だったと思います。私の父親が青山にあった「石勝」という江戸時代以来の老舗で国語読本巻９に「石やす爺さん」と紹介された全国規模の石材店のオーナーと懇意で、大学在学中に「せっかくの大学で植木屋の勉強をするくらいなら石屋『石勝』でいろいろ学べ」と勧められました。その後、会社を立ち上げる時に東急電鉄の実質オーナーと言われ慶太翁を継いだ五島昇社長との縁で東急グループの造園会社を立ち上げるに際し「君は『石勝』にいた人間で、建物の外の仕事がしたいそうだから『石勝エクステリア』にしなさい」と社名が決められたのです。

小倉氏　唯一の資源〝森と水〟が最大テーマ

司会　話は変わりますが、建築家や造園家、落語家といった「家」の付く職業がある意味についてお二人の意見をお願いします。「屋」を付ける場合もありますが。

涌井　「屋」は自分をへりくだって言うときに使います。私は造園家ですが、「造園屋です」と言うと比較的一般の人たちに近いところに行けますから。

小倉　その最たる例が「土建屋」です。「建築家です」と言うと「建築家の方に家の設計なんてお願いできないわ」と言われるかもしれませんが、「建築屋さんならお願いしようかしら」みたいな感じです。冗談はさておき「家」が付く人はある一定の資格を持っていて「全てお任せ下さい」と言える人の意味ではないでしょうか。

涌井　アーキテクトとグランアーキテクトは違うと思っています。昔はグランアーキテクトというのは、祭壇やステンドグラス、屋根の彫刻などを全部自分の感性でつくっていました。明治の頃に日本に来たお雇い外国人の図面を見ると、全部書いていました。

司会　何と27歳。今でいうスタートアップ企業の先駆例かもしれません。

司会　涌井さんから以前にスリランカの建築についてお話をうかがったのですが、紹介していただけませんか。

建築家バワのすごさ

涌井　スリランカにはジェフリー・バワという有名な建築家がいまして、彼が設計した森の中のホテルに感動しました。自然に打ち勝つ建築という構えが全くなく、供用されてからわずかな時間しかたっていないのにもう負けそうなのです。ホテルに木の根っこが絡んで、外のルーバーも腐っている部分があるのですが、極めて魅力的なホテルとして機能しているのです。改めてバワのすごさ、そういうホテルを実現させてくれるクライアントのすごさを実感しました。

小倉　バワの建築のようにプールの先から水が落ちて、また水があって、かなたまで水が一体になっているプールはたくさんありますが、同じようなことは日本人も結構やっています。

涌井　いわゆるインフィニティプールですね。やっています。さらに申し上げれば、日本の庭園の手法の中に〝水鏡〟というのがあります。

小倉　バワの作品からは「建築って何だろう」という原点みたいなものを感じます。イギリスに留学してヨーロピアン建築の勉強をしてきたにもかかわらず、あのような建築の世界観をつくったのは本当にすごいと思います。

涌井　アーティフィシャルを力学的対処で、自然に打ち勝つあるいはその力から人為を防御するといった、敵対または競争関係で自然を捉えるのが西洋の建築だとすると、彼が考えているのは移ろいだと思います。つまり、彼の建築は空間デザインのみならず、あえて言えば時間のデザインでもあるように思えます。自然と同化しながら移ろっていくという建築ですから、乾いた壁だとか石の構造も自然をはねつけるのではなくて、有機的に一体化しようという試みは随所に見ることができます。

バワがデザインしたヘリタンス・アフンガッラ・ホテルのインフィニティプール

司会　小倉さんはＵＩＡ（国際建築家連合）２０１１東京大会の日本組織委員会会長を務められました。

小倉　丹下（健三）さんや前川（國男）さんの頃からＵＩＡ世界大会を日本で開きたいという話は綿々と続いてきました。僕らの代になってもうやるべきだろうと思って手を挙げたのですが、応募して３回目でやっと実現しました。

涌井　ＵＩＡ東京大会は、日本の若い人たちに大きな影響を与えたと思います。ある種の目標ができたという印象です。小倉さんたちの企画ですごく良かったのは、センターコアに全てを集中させるのではなくて、あちこちにサテライト的なクラスターをつくって、そこで多様なレベルや身近な催しを積み上げていったところだと思います。

小倉　その年は３月に東日本大震災が発生し、秋に大会を開くことに対して国内では批判的な意見もありました。そこに海外から「こういう時だからこそやるべきだ」というメッセージを受け、大会テーマを『災害を乗り越えて』というテーマに変え、規模も縮小して開きました。結果的に東京大会は黒字になりました。ＵＩＡ大会が黒字になったことはその時までにないことでした。

涌井氏　五感動員しリアリズム習得を

小倉　僕は「マネジメントとデザインをどう分けていますか」とよく聞かれます。仕事が大きくなればなるほど、僕の使うエネルギー量はデザインよりもマネジメントの方が多くなります。下手をすると60％、70％がマネジメントで、残りの30％ぐらいがデザインという場合もあります。マネジメントをやらないと30％ができないというわけです。

涌井　よく分かります。私もプロデューサーみたいな位置付けを割り振られた折に自分に言い聞かせるのですが、本当は自ら演奏したい。だけど、コンダクターにならないと、オーケストレーションにならず、良い演奏にならないのです。

司会　涌井さんは27年に開かれる横浜国際園芸博覧会の招致に携わられました。テーマは『幸せを創る明日の風景』ということですが、ご紹介いただけませんか。

成熟社会を目指して

涌井　私がなぜあのテーマにしたかというと、成長が幸せの原動力だと考える世界はもう終わったと思うからです。われわれが今後目指すべきものは成熟で、お金がたくさんあるから幸せという時代ではありません。『釣りバカ日誌』で言えばスーさんではなく、ハマちゃんのように、自分らしく生きていくことに自分の人生の時間をどれだけ消費できるかという考え方です。これからはそっちの方へ社会がシフトしていかないと、地球も、自分ももたないと思います。

ＵＩＡ2011東京大会　世界建築会議の開会式

小倉　日本はもう経済的に一流国でも二流国でもなくなっていますから、そっちにシフトしていかないと不幸せで、果てしない夢を持ったまま沈没するみたいなものです。だから僕は、森と水が大事だと言いたいのです。

涌井　実はすごい危機感があって、デジタル社会になればなるほどリアルが大事になると思います。デジタルに振れれば振れるほどリアルに戻る範囲を大きくしていかないと、みんな大変なストレスになります。

小倉　人間の長い歴史の中でこれほどデジタル化が進むと、やっぱり体そのものが対応していけないと思います。

司会　最後に次世代の方々に向けてコメントをいただきたいのですが。

涌井　やはり大事なのはリアリズムをどれだけ身に付けられるかということではないでしょうか。つまり、頭の学問ではなくて、五感をも動員した総合的な技術の体系を身に付けてほしいということです。私が学長を務める岐阜県立の森林文化アカデミーで一番力を入れている教育は、一流の職人として自他ともに知られている人々を教壇の前に連れてきて、その仕事を学生たちに見せることです。例えば『ＮＨＫ大河ドラマ・真田丸』の題字を手掛けた挾土秀平氏という左官職人に１週間、壁を塗ってもらい、それを学生たちに見せたことがあります。学生たちは食い入るように彼の技や表現力を見つめていました。

小倉　僕が心配なのは、もともと日本人はデジタル化に適している人種でないということです。二進法は欧米人に向いていますが、日本人は部分的に直感のようなものを大切にして物事を決めてきました。今の子どもたちが何も分からないまま二進法の方向に進んでいくと、適性がないため欧米人に比べて劣るわけです。

涌井　五感を無視してデジタルネーティブになったら、確実に不幸になりますよ。

小倉　テレワークによる会議などもパソコンのカット・アンド・ペースト的で、思いが込められなくなってきているような気がします。これを回復するには田舎に行くしかありません。「美し国」に行くのです。

涌井　「美し国づくり」の「美し」には単に美しいのでなくて、さまざまなリソースがそこに眠っています。これを実現すれば日本人がリスペクトされたり、プラネタリー・バウンダリー（地球の境界）みたいな状況をより持続的にする知恵を見いだしたりすることができるかもしれません。

涌井　レジリエンスということにみんな関心があるので、世界から多くの人が来たと思います。

小倉　〝災害国日本〟には世界に発信する貴重なものが多くあります。資源のない日本で唯一の資源は森と水です。この森と水をどう考えるかが日本にとって一番大きなテーマで、誤解を恐れずに言うと工業国とかＩＴよりも重要だと思っています。

涌井　おっしゃるとおりです。われわれは『愛・地球博』の後にＣＯＰ10「生物多様性条約第10回締約国会議」を招致しました。その際に２０５０年目標として「Ｌｉｖｉｎｇ ｉｎ Ｈａｒｍｏｎｙ ｗｉｔｈ Ｎａｔｕｒｅ」というものを合意しました。50年には自然とともに生きられる世界をつくろうという意味です。しかし、欧米人にはあまり受け入れられませんでした。キリスト教社会では「スチュワードシップ」（荘園の管理者）という概念が支配的です。神から与えられた自然という荘園を人間がマネジメントしていくという思想です。人間が自然の中に没入するような「『Ｌｉｖｉｎｇ ｉｎ Ｈａｒｍｏｎｙ ｗｉｔｈ Ｎａｔｕｒｅ』なんてわれわれには通じない」と言われました。

小倉　国際的には生態系、自然をリスペクトすることは大切だと言われていますが、さらに進めて自然の中に溶け込んだ生活を送るというのは、日本が推進するべきだと思います。